

桂影舎露葉編『こゝろの杖』

伊藤善隆

はじめに

本稿は、桂影舎露葉編『こゝろの杖』（年刊、個人蔵）を翻刻・紹介するものである。

露葉は、大坂の美濃派俳人である。別稿「桂影舎露葉編『かゞみ餅』」（『立正大学大学院紀要』第38号、令和4年3月）でも触れたとおり、東武獅子門、すなわち江戸の楚石坊の門人で、享和から文化・文政期にかけての活動が確認できる。

本書は、序文中に「ことし^子が初老の賀筵を開き」とあることから、露葉の四十歳を祝う撰集であることが分かる。

前掲別稿にも記したとおり、これまでの東武獅子門研究は、おもに楚石坊の師である玄武坊以前の事象が問題とされており、楚石坊が注目されること自体があまりなかったといつてよい。そのため、露葉も研究の俎上に置かれることがなかった。

したがって、楚石坊の俳諧活動や露葉の伝記的事跡、あるいは大坂における東武獅子門の活動を明らかにしようとするれば、本書はその基礎資料となる重要な文献である。

（付記）

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「天保俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号 22K00327 代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

〈書誌〉

書型……刊本。半紙本一冊。楮紙、袋綴じ。

表紙……香色布目原表紙。縦二二、八cm×横一五、八cm。

題簽……原題簽、中央無辺。「こ、ろの杖」。

版式……無辺無界。每半葉八行十八字内外。卷末付載の奥目

録（一丁分）は四周双辺、有界九行、白口、単魚尾。

字高……一五、二cm（序文初行「あら玉のゝいと」を計測）。

奥付……「東都書林 芳芸堂 鴈金屋利兵衛／同彫工 廣井

秀峯」。

柱刻……上象鼻に柱題「杖」、下象鼻に丁付「一（〜十五）」。

なお、卷末付載の奥目録（一丁分）は丁付無し。

丁数……全一六丁（卷末奥目録を含む）。

その他……「七」才「酔た湯も出てさまされぬ冬の月」の「も

と「されぬ」の部分は、胡粉を塗った上から墨書で

訂正している。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。

異体字等は、概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、（）」

内にその丁数、および表・裏（オ・ウ）を示した。

参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

〈翻刻〉

こ、ろの杖

（白紙）

序詞

あら玉の年立かへりて、四方のけしきもいと麗かに、梅も窓前に時めきて、鳥の初音もたゞに聞すてがたき折なりけり。例の連中を草庵にまねきて、ことし^子が初老の賀筵を開き、百韻の一順をつゞりて此日の時宜はと、なへ侍りしが、是を此まゝに^和捨置んよりは東都の諸君へも廻して、又その一順を乞んも此時の幸なるべしと、まづとて楚石老師の許へ送るに、やがて一卷満尾の俳諧とはなれりけり。されば轍魚水を得たるの思ひを悦び、はた師の洪庇をも謝せんにはと、是を梓にもものして、ことしの春帖に加へ、諸国通志の人々へも披露におよぼんとは、我党の衆議に寄れる^和なるべし。さはよし、道の辺の芝生がくれの下葉さへ、露のめぐみの折を得て花咲く春に逢ふこ、ちとは、此時をこそいふべけれ。

桂影舎

文化八辛未歳二月

露葉

〔露葉〕〔朝陽〕〔清秋僊〕〔朝陰〕

百韻

くり返せ鳥の百千を幾春も

遊ぶ麓にすゑも長き日

咲下るしら藤滝と見間違ふて

おして外^トから明ける枝折戸

鼯笑はれて昼寐の目をこすり

居はり直せど又膝が出る

下冷へはいつも事なる後の月

新酒の爛に火が通り過

ウ 女房は秋世話しがる櫛がけ

ものをいふ間に何所へお小僧

入れて来た袋に猫が啼て居る

煤のさはぎに椽までの煤

たま〜にわせたる伯母へ壁訴訟

着せてから縫ふ夜着の綻び

同じ旅ながら木曾路は気がはらず

朝も蝸暮も日ぐらし

月に際残る暑さもさめてから

夜長をあてに連歌催す

「(オ三)」

小便のしげさを祢宜の譏らる、

びんと茶碗のこける板の間

咲てから一^ト木の花も賑かさ

あれあの被うら、かな事

ニラ 飛^バ汁に畔ぬる鍬の手をひかへ

境の際も寺領神領

枯かゝる松が不思議に青み立

能ふ古るい事祖父は覚へた

御褒美とあつて当座の式百疋

燭台の火に次も明るい

鼻紙にひねつて蜈蚣すてにけり

若いが姫のきてん中〜

ちぎらずに瓜盗人は逃てゆく

開発村の道はひと筋

茶にも汲み湯にもくむなる細流

今世に残る西行の歌

挨拶に眼鏡をはづす月の照

鼻に夜寒の見ゆる年寄

ニウ 出替りは気がる過たる笑ひ好

跡なく晴てしまふむら雨

繫いだり解たり幾度わたし舟

不勤な座頭手を取て引く

可水

東明

天鷲

東武連 睡居 「(ウ三)」

其詠

柳雪坊

有橋

寄連

恵十

龜林

常山

石水 「(ウ四)」

菊兔

一声

志雪

蘇慶

再尼坊

菊車

雨江

素月 「(ウ四)」

塘雨

五風

破れやすい瀬戸もの、鉢大事がり

土用一ぱい虫ほしの世話

夕ぐれに月のさしこむ青簾

新地は金のすて所やら

悟気にも道理のあると又ないと

燈さねや見えぬ闇のてうちん

棧の下は千尋の谷の底

のこる寒(薄点マ)のぞつとする也

花よりも団子とは能キ世のたとへ

藪入待る母の心配り

開帳ミラの日に指を折てみる

けふもきのふもおと、いも雨

細ふ立つ筈の煙のもの淋し

御製のあはれ泣ぬものなき

さふ聞けばちと奢なる葉喰

とふく雪に成ばなつたり

右りには富士左には筑波山

五言一首に油費す

ない時は便りも絶える波のうへ

蚊の啼くうちは鳩もわたらず

まん丸になつて踊も盆の月

汗ふく袖へ文入れて遣る

蕉雨

左光

竹蓑坊

支園

百竅

不鐸「(オ五)

器水

一口

其音

松旭

由亀

子籟

智雄

玉珂「(ウ五)

兔江

似月

如舟

知牛

静河

雷山

文桃

栄枝「(オ六)

三口ほどはさすがに嫁まが働きも

寺へゆき、の長い大門

じいくと朝から蟬にあぶら照り

世話しい妹気のゆふな姉

梅干を張つた頭痛をおかしがり

行燈の火口こちへふり向け

まだ米はつけぬ確かたくと

勝にも伊達の茜ふんどし

酔た湯も出てさまされぬ冬の月

たてた障子に穴がいくつか

稲荷まへなれば狐も住んで居る

知らぬ顔して水をさす恋

暮てさへ闇にはならぬ花の下

過て行く日のおしい三月

ぬらくらと気長同士のとろ、汁

それは木枕これは手枕

ちよつとにはかぞへも尽ぬ千松嶋

面白ふ夜の明けかゝる空

解てから恨んだ愚痴を笑ひ合

罰のあたらぬ神へわび言

方角も紙帳の中はわかり兼

鴉の声の行かもどるか

隨化在東都

程有

兔山

季柳

葛路

文郷在東都

梅後

桃鯉「(ウ六)

桃宜在東都

後弓

壺酔

斎婦

烏林

五成

兔園在東都

貫糸「(オ七)

錦轡

里杏

松雨在東都

英夫

固住

山旭

雲ふんで登り課せし峠越え

似せ山伏と見えぬ弁慶

人先へはじめた飯が人の跡

直キに飛ばぬも秋の蠅だけ

暮いそぐ日に昼間から月の影

どこかやさしいおしろいの花

ナウ 尼寺に男といふは子供でも

訊聞てから飛脚うなづく

違ふのも京と田舎の銭相場

馬の便りも市の六さい

響の通辞に口がくたびれる

飲む真似をして廻す盃

名に祝ふその初老も花に今

今かうばしき草も此時

恕行

素燕 「(ウ、七)」

其滴

雨幸

以中坊

時来

李風

羽白

夏幸

牛霖 「(ウ、八)」

此秋

其跡

楚石坊

百花坊

三千とせの目あてや園に桃の花

汲めばなを若やく春やその流

まだ杖はいらでかんばし菊の苗

千代を今ひらきはじめや松の花

春なれや今ぞ若やく木くゝの色

梅が、に道のすゝみやこの春は

藤咲や松の千とせも若やかせ

菜の花や世の長閑さも是からぞ

連莞やその末長き姿ども

その声も千代と囀る雀かな

花に来て舞ふや胡蝶の名も揚羽

是からを遊びも長き柳かな

幾枝に戻る替や若みどり

花に葉に強みを見する椿かな

糸竹の遊びも、茶酒の楽しみも、かへり見れば三十九年

の非となるにぞ。たゞ此道のひと筋にたどり入らんに

は

老の名や遊ぶ

こゝろの杖を花

露葉 「(ウ、十)」

大坂連中

一湖

千遊

春枝

巴遊

祝章 東都連中 大阪なる桂影主人が初老を祝すとて、叶韻の一句を送

る

はつ老の名もひらきてや花に今
 憚からぬ杖のはじめや野、遊び
 手に馴ぬ杖やつく日の芽出しとも
 老の名を鳥も名のるや四十雀
 梅が、にまどはぬ道や春も今
 時得たる老曾の森の若芽かな
 老の名や水葱の名にもまどはねば
 幾声も囀れ年を百千鳥
 蓬萊やそれをはじめの老の坂
 その杖も野に果あらじ遊ぞめ
 末長きためしや蔦の若葉より
 初老の影も移すかかゞみ餅
 老の名はありても若し松の春
 杖つくは千とせの後よ松の花
 俳かいも花咲く老のはじめかな
 松の花まだはつ老の若白髪
 目にはまだ霞そめぬやはつ桜
 喰つみや歯音にはまだ老の名も
 老ぶりは見せず若やく芽出しかな
 はつ老や寄るを祝ひの波も花
 つきそめる杖うら山し花の時

再児坊
 烏林
 睡居
 有橋
 恵十 「(十一)」
 寄連
 常山
 亀林
 一声
 菊兔
 志雪
 石水
 蘇慶 「(十二)」
 雨江
 素月
 如舟
 不鐸
 菊車
 山旭
 子籟
 智雄 「(十二)」

初老や松にたとはゞ若みどり
 机上有合 四季混雜
 新らしい傘目に立つや五月雨
 畑うちや暮るまで野に人の声
 風鈴にさす月清し夕涼み
 五月雨や手の跡の付くぬり枕
 雨の音聞てた、むや日傘
 河骨や水の流る、花のうへ
 ひとしきり松も声なき暑かな
 埋火をたねや茶を煮る老夫婦
 全
 宮守りの夕暮はやし夏木立
 納所まで同じ狐や葉喰
 馬の尾へ来てからみけり秋の風
 蝙蝠の出で蚊柱のくづれけり
 晚鐘を葉に悟りてや合歡の花
 陽炎や梅へ菰敷く作り道
 鍋つるを橋に遊ぶやみそさゝい
 鷺追ふてふりこぼしけり田螺取
 骨なくて歯なしに咬めぬ海鼠かな
 足みせて泣く子を怖す田うち哉
 藤の花法花の珠数にくらべけり

百花坊
 竹簀坊
 其音
 松旭
 霞鶴
 玉珂
 恕行 「(十三)」
 榮枝
 文桃
 其詠
 柳霽坊
 塘雨
 由亀
 蕉雨 「(十三)」
 静河
 百竅
 五風
 器水
 支園
 一口

(六二)

風道へ出むかふ色や青すだれ

兔江一(ウ十三)

趣向にも手あり角力の年忘

素月

虹の橋ふたつに消えてほとゝぎす

似月

生酔の横に隔る日傘かな

左光

まだ残る寒さをつまむ根芹かな

里杏

鉢巻で典座も出たり麦の秋

貫糸

その跡で火をつみ直す袖みそかな

素燕

行春や蝶は青葉に来てまよい

知牛

萍や釣らるゝ魚に付て来る

錦輅一(ウ十三)

世の人を浮かす新茶や仏生会

五成

戸まどひを外トからするや五月闇

文郷

野遊びのふくさに包む土筆かな

季柳

蓮池や水へは降らぬ雨の音

兔山

足元にあぶない石や木下闇

英夫

うら枯や狸の穴もあらはるゝ

桃鯉

咲てから人をつなぐや糸桜

固住

蛭や夜寒も壁のうらおもて

葛路一(ウ十四)

全

雨催ふ雲引つれて鴈の声

以中坊

折れば手に針のとがめや茨の花

此秋

はじまると庵主は逃る踊かな

雨幸

名月の影や一際蕎麦の花

羽白

牛繫く岩角さがす清水かな

野有

紅梅や余寒も雨に消てより

時來

菜の花や一株畔にふみこらへ

夏幸一(ウ十四)

塩竈のけむりは消て蚊遣りかな

其跡

芦の葉に笛の音もあり秋の風

李風

はつものも口にあまるや唐がらし

牛霖

寄ればむせ逃れば痒き蚊やりかな

其滴

秋は腰かけたるまでやちる一葉

桃宜

川せみや見すまして居る溜り水

梅後

蚊屋ふるふ風朝顔に風かな

松雨

糠雨に実のある音や落椿

随化一(ウ十五)

豎横も闇はあやなき焼野かな

兔園

此道のひと筋に遊びて老後を俳かに楽んと聞へたる

桂影主人を祝す叶韻

はつ老や世に

楚石坊

花咲かす荅とも

一(ウ十五)

東都楚石師連中俳書目録

其真砂 寛政十二己未年ヨリ 年々嗣出

此書は、東都并諸国の連中より楚石師の点検を乞ふその甲乙を定めて、
たる秀逸句を撰み、俳諧に句案の助けとなる書なり。

ちり松葉 東都 野梅撰 そのふもと 上総連中撰

朝かすみ 全 一桃撰 五月の夢 出羽連中撰

越のむかし 全 麦里撰 明の月 相模連中撰

霜の跡 全 蘇慶撰 世のたとへ 東都 赤阪連撰

齢くらへ 全 文桃撰 月もゆめ 全 錦其 輅詠 撰

おなし臺 全 流梅 保枝 撰

(黑板)

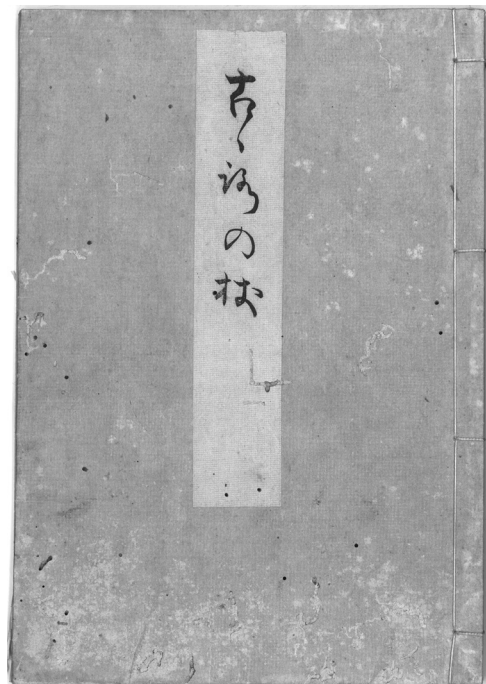
東都書林 芳芸堂 鴈金屋利兵衛

同彫工 廣井秀 峩

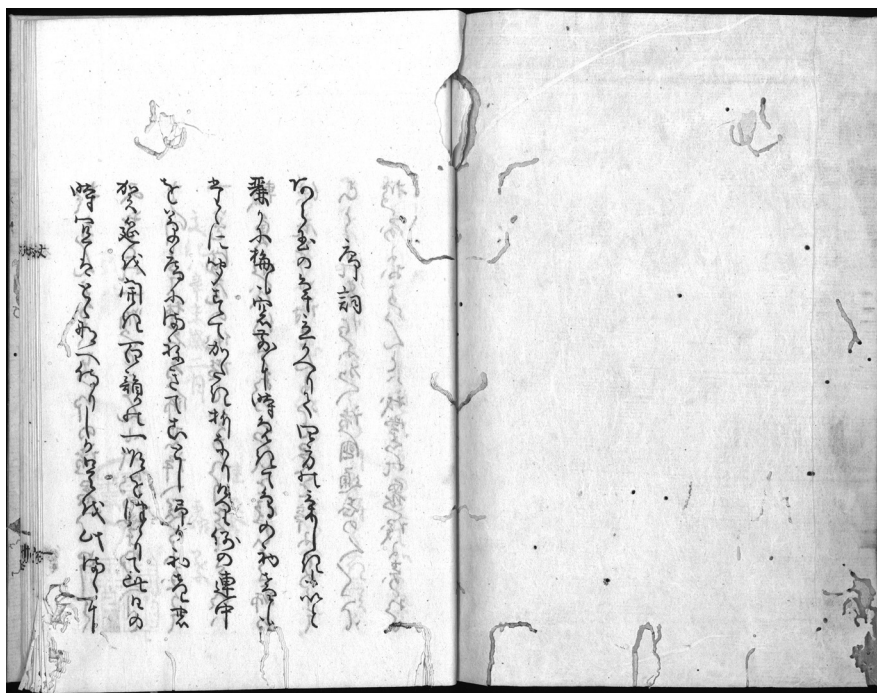
(白紙)

〈参考図版〉

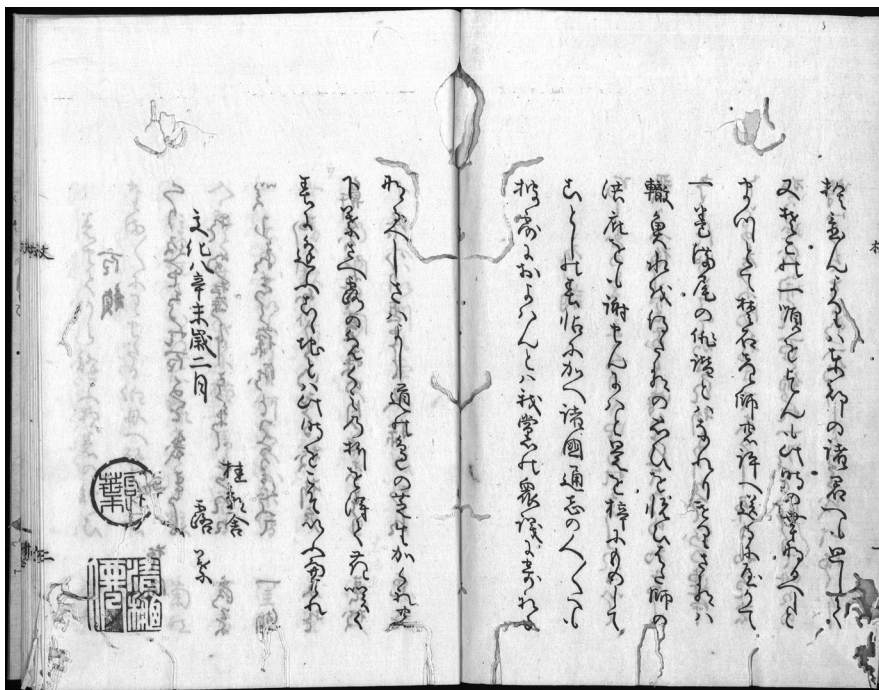
1. 表紙



(六四)



2. 序文冒頭 (二一才)

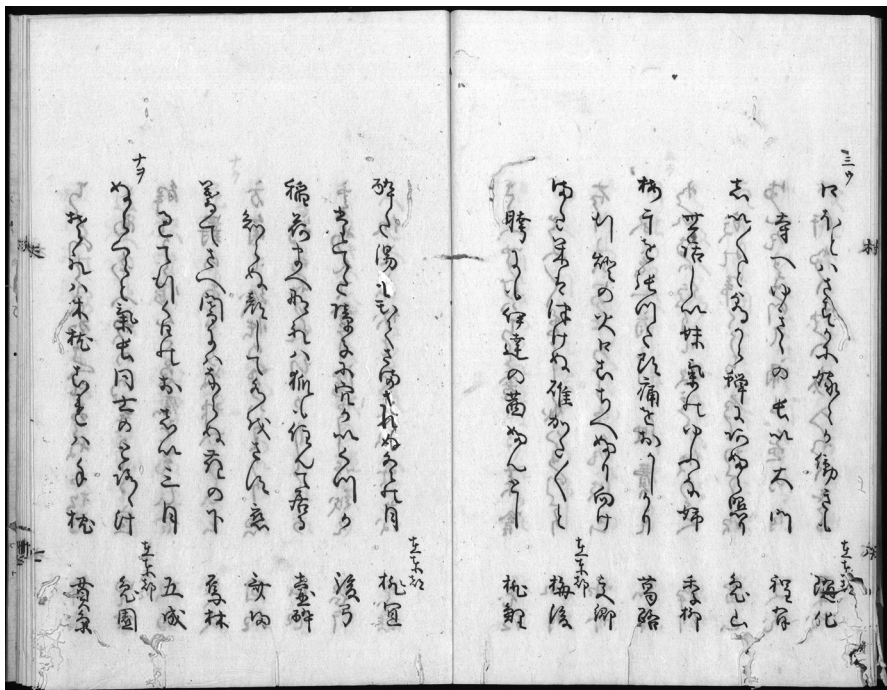


3. 序文 (二一ウ・二二才)

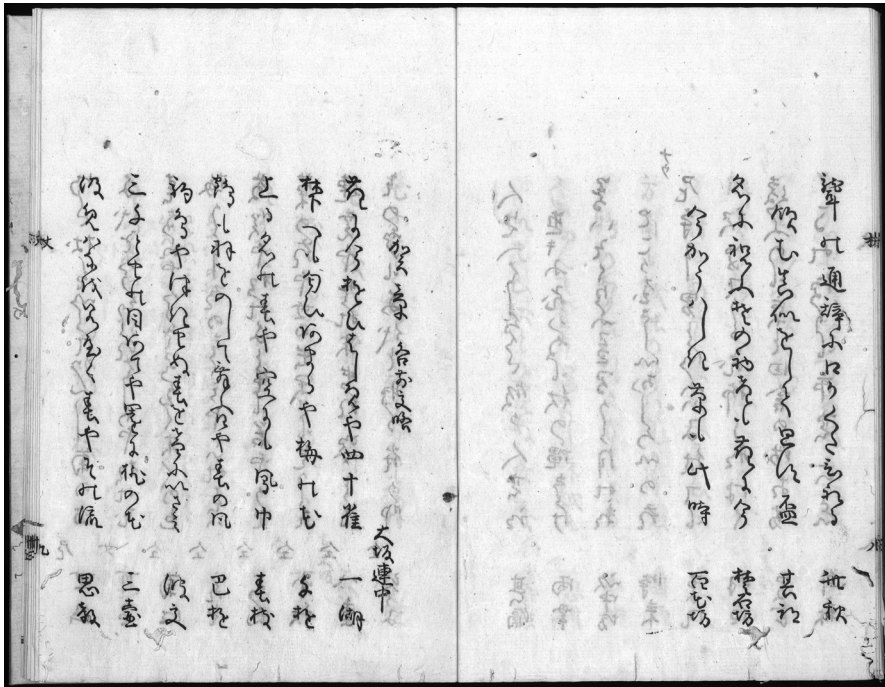
4. 本文巻頭（二）ウ・「三」オ



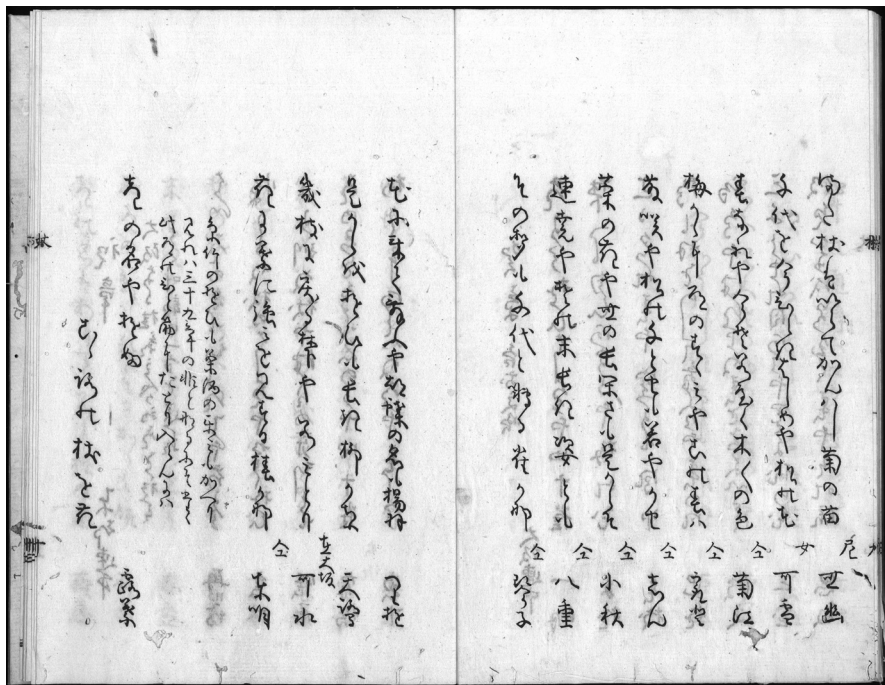
5. 本文（六）ウ・「七」オ

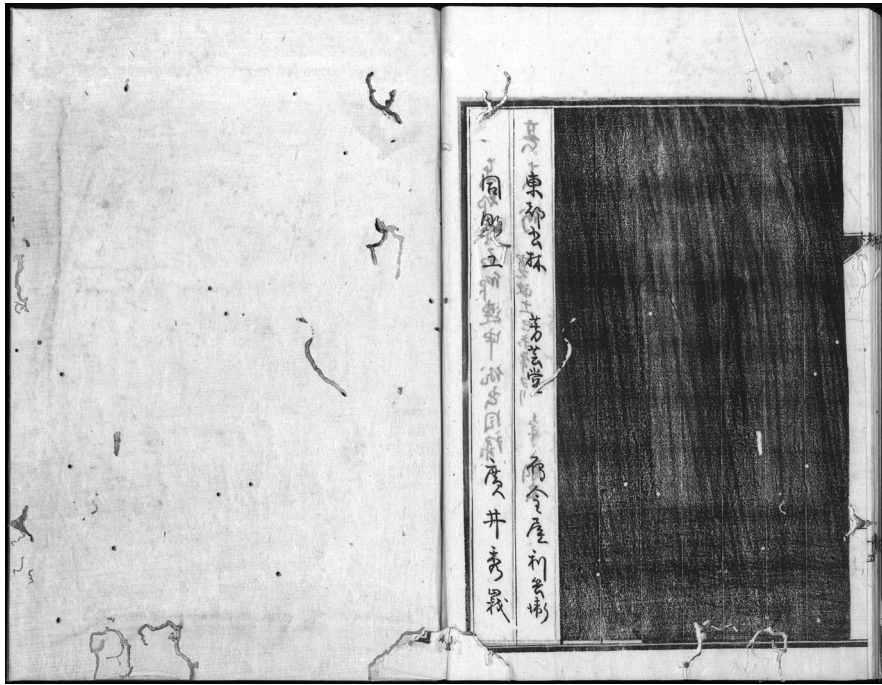


6. 本文〔八〕ウ・〔九〕オ



7. 本文〔九〕ウ・〔十〕オ





10. 奥付（奥付ウ）・裏表紙見返し）

（二〇二二年十一月三十日受理、二〇二二年十二月二十一日採扱）

